リレー連載

編集委員の目

更年期医療をめぐって——今日の常識は明日の非常識？

●第8回

松山敏剛

更年期と更年期障害

現在は更年期ばやりである。新聞の家庭欄や医療記事には更年期障害の記事が頻繁に掲載される。書店には更年期関連だけの書棚が設けてあるし、インターネットで更年期をキーワードとして検索をかけると七六万四〇〇〇件もヒットした。

福岡市の中心地で小さな産婦人科クリニックを開業している私でさえも、患者さんから「先生、私は更年期でしょうか」と尋ねられることがある。

更年期とは産科婦人科学会では「生殖期から生殖不能期への移行期である」と定義しているが、患者さんは自分がこのような時期にあるのかと私に尋ねているのではない。「更年期」という言葉で、自分の症状が「更年期障害」であるのかと聞いているのである。私は彼女の症状を判断して「そのようですね」と返事をしている。

このように、更年期とは人生のある時期を指す言葉であるが、一般には病名としても通用している不思議な言葉である。更年期という言葉について、その語源、歴史的背景などを調べて学会で発

表したことがある。興味ある事実を明らかにできたがそれについては別の機会にゆずり、ここでは更年期障害の治療について述べてみたい。

ホルモン補充療法（ＨＲＴ）

更年期障害はのぼせ（ホットフラッシュ）、冷汗、冷え性、心悸亢進などが特徴的で、エストロゲンの分泌不足に伴い引き起こされる症状と考えられている。更年期では閉経に伴い卵巣から分泌されるエストロゲンが低下するので、それにより各種の症状が出現すると考えられる。

エストロゲン不足による症状であるから、不足したホルモンを補充するとの考えから、ＨＲＴが更年期障害の特効的治療とされてきた。事実、のぼせ、頭痛、いらいら、不眠などの症状はホルモン剤の投与でウソのように消えてしまう。当初はエストロゲンのみを投与する方法や、元気をつける意味でエストロゲンと男性ホルモンを混合して注射する方法などが行われた。しかし、男性ホルモンを混合すると元気はつくが、多毛や声が低くなるなどの男性化が起こった。エストロゲン単独では子宮体がんの発生が増加した。効果はあるがエストロゲンによるＨＲＴはあまり積極的に行う治療ではなかった。

一九八〇年代になって、女性ホルモンの一種である黄体ホルモンの合成プロゲステロンをエストロゲンと併用すると、子宮体がんの発生はかえって低下するという研究結果が発表された。しかもその発生率はホルモン療法を行っていない女性よりも低くなるというのである。これで事態は一変した。いまやＨＲＴはがんの予防法になったのである。しかも、エストロゲンは高脂血症を改善し、動脈硬化や心臓病の発生を低下させる。将来予想されるアルツハイマーの予防、骨粗鬆症の予防など数多くのメリットがある。更年期以後の女性の人生をバラ色に変える治療であるともてはやされた。更年期医療の学会である更年期医学会はもちろんのこと、産婦人科あるいは看護の学会に出席しても、ＨＲＴの演題が花盛りであった。ただ一つ、乳がんの発がんの可能性はあるが、ＨＲＴ中はきちんとがん検診を行うので、もし乳がん

が発見されてもそれは初期がんで予後の良いがんであると信じられた。更年期を過ぎた女性は一生ＨＲＴを続けるほうがいいとさえ考えられた。

ところが、一夜にしてこれに水をさす研究結果が発表されたのである。

ＷＨＩ報告

二〇〇二年七月アメリカ医師会雑誌で、米国国立衛生研究所（ＮＩＨ）は結合型エストロゲンと酢酸メドロキシプロゲステロンを健康な女性約一万六六〇〇人（五十歳から七十九歳）へ、平均五・二年間投与したホルモン補充療法に関する治験を突然中止することを決定し、発表した。この研究はWomen's Health Initiative（ＷＨＩ）の研究と呼ばれたが、中止の理由は大腿骨頸部骨折、結腸直腸がん、全がんの発生数はそれぞれ三四％、三七％、二四％減少する一方で、乳がん、心臓発作、脳卒中の発生数は二六％、二九％、四一％増加し、この治療により得られる恩恵よりも、治療によるリスクのほうが上回るというものであった。

この発表は膨大な量のＨＲＴが処方されているアメリカでは新聞やテレビで広く報道され、日本でも読売新聞でいち早く報道された。ＨＲＴの効能を信じ、更年期の女性にホルモンを処方してきた日本の婦人科医にとっては青天の霹靂（へきれき）であった。

その後イギリスよりＨＲＴと乳がんに関する一〇〇万人を対象とする疫学調査の結果が発表された（Million Women Study）。結果はＨＲＴによって乳がんのリスクが上昇するというＷＨＩの結果とほぼ同様のものであったが、注目されるのは、かつて子宮体がんの予防効果ありとしてＨＲＴへ組み入れられたプロゲステロンが、それを併用することによって、エストロゲン単独よりも乳がんのリスクが約二倍上昇するというものであった。

医療情報

「日本の常識は世界の非常識」という言葉がある。私は時々「現在の常識は明日の非常識」という現実に直面することがある。世俗的な風習などで、命に関わらないものごとならば問題にならな

いが、医療でこのような事実があるとどうであろうか。

最近新聞紙上をにぎわした、フィブリノーゲン製剤によるC型肝炎感染では、この薬を購入した医療施設のリストに、数多くの産婦人科病院の名前があった。フィブリノーゲンは、産婦人科でよく遭遇する線維素溶解現象（DIC）による大量出血に対して、強力な止血剤であると宣伝された。とにかく出血を止めなければ患者の命が危ないという切羽詰まった状態で私も使った覚えがある。当時C型肝炎は発見されておらず、後で問題になるなど夢にも思わなかった。

学校で習った知識はすぐに古くなる。常に新しい情報を取り入れていかなければ時代に取り残される。しかし新しい治療法がすべて正しいというわけではない。華々しい宣伝を繰り広げた新薬が数年のうちに消えていくこともよくある。新しい情報を取り入れる一方で、その情報を盲目的に信じることを避ける、相反する態度が医師には要求されるのである。

そして、更年期医療に目を転じると、HRTは女性の将来をバラ色に変える治療法ではなかった。その後の報告でアルツハイマーの予防効果もあやしくなった。ただ、HRTに匹敵するほどの特効的治療法がないため、われわれは対象を絞ってHRTを実施している。

絶滅危惧種の産婦人科医になって40年。大学勤務が長く開業医生活はいまだ4年目。趣味は広く浅くです。自動車はパブリカ、パソコンはBASIC、写真は二眼レフ、鉄道模型はOゲージ、ラジオ工作は5球スーパー時代からのつきあいですが、進歩しません。

今後へ向けて

更年期障害で苦しんでいる当人の悩みは周囲の人々にはなかなか理解されない。気のせい、なまけ病、一時期的なもので時間が解決する、などと軽くみられがちである。一方でインターネットのホームページを見ると漢方やサプリメントなどあらゆる治療法の宣伝がみられる。いまだにHRT

礼賛の記事もある。更年期障害は命に関わる病気ではない。しかも身体臓器のどこかに病理学的異常があるものでもない。それだからこそ、悪徳業者に付け入られやすい。

更年期は将来の老年期を健康な身体で迎え、快適な老後をすごすための大事な時期である。わが国は少子高齢化が大きな問題で、少子化対策としての「健やか親子21」、高齢者の介護福祉を強化する「ゴールドプラン21」などの政策が立てられている。しかし病気になって介護を受ける老人ではなく、健康な老人を増やし、介護を受ける人口を減らすことのほうがさらに重要であり、そのためには予備軍の更年期の健康を増進させなければならない。それなのに、更年期の男女の健康を支援する政策は現在皆無である。

最近は男性にも更年期障害があることが話題になっている。日本人に対する更年期医療のあり方、HRTに代わる新しい治療法の開発、更年期障害に対する支援のあり方などはこれからも検討を続けねばなるまい。

◎著者注……誤解を避けるために付記するが、HRTは現在も実施されている治療である。日本更年期医学会ではHRTを行うに当たって、リスクベネフィットを十分に判断すること、更年期症状の治療に用いること、骨粗鬆症や心血管系疾患の予防を目的とした使用は避けることなどの指針を発表している。

●松山敏剛（まつやまとしたか）
産婦人科まつやまクリニック院長。教育と医学の会理事。医学博士。専門は生殖医学。九州大学医学部助教授、佐賀医科大学医学部教授、中村学園大学家政学部教授などを経て現職。九州大学大学院医学研究科博士課程単位取得退学。著書に『医科学大事典補遺巻10』（講談社、一九九二年）、『産婦人科MOOK No28』（金原出版、一九八四年）、『図説臨床産婦人科講座』（共著、メジカルビュー社、一九八〇年）など。

編集部から

「教育と医学」のメールマガジン（無料）の配信を昨年末から始めました。

四月二十六日までに登録しますと、四月二十七日に第5号が配信されます。

メールマガジン配信は、慶應義塾大学出版会のホームページ（http://www.keio-up.co.jp/kyoiku/）からお申込みください。アンケートプレゼントなどもありますので、ぜひ登録してご覧ください。